

奨学会研究報告

保育器の消毒と細菌の汚染状況に関する検討

弘前大学教育学部看護学科教室

木村宏子

未熟児管理において、感染予防は重要な問題である。特に保育器内の高温・高湿環境は未熟児保育に必要不可欠なものであるが、その環境はまた、細菌の増殖にも好都合となる。

したがって、保育器を清潔に管理することは、未熟児の感染予防上、大切なことである。

しかし、保育器の清拭および消毒方法については、いまだに統一された報告はない。

すでに、前第6回四大学研究会でも報告してあるが、保育器の清拭および消毒方法について、全国198施設の小児科、産科病棟を対象に調査した結果は、各施設によって、それぞれ異なった手順がとられている現状であった。

そこで、未熟児、新生児を収容している保育器の経時的な汚染状況を細菌学的に検討し、保育器の清拭および消毒方法について考察を加えたので報告する。

実験方法

1. 対象

弘前市内S,T病院の産科病棟の未熟児室において、未熟児および新生児を収容している保育器を対象とした。

2. 実験材料の採取

保育器内のプラスチックフードおよびビニール袖の4箇所から、清拭前後に滅菌綿棒で採取。また、同時に児の口腔内より滅菌綿棒で材料を採取した。保育器内の湿度計および加湿槽水は、交換前後に滅菌済み注射器で採取した。

3. 菌の培養方法および同定

プラスチックフード、ビニール袖および児の口腔内から綿棒で採取し、血液寒天培地、BTB培地に塗布し、37℃恒温室で24～48時間培養し同定した。なお、湿度計、加湿槽水は定量培養を行なった。

以上の方法による実験を行ない、その結果について考察を加えたので報告する。